

年季契約労働者の歴史人類学

—植民地時代サモアのプランテーションと労働者—

1

山本真鳥（法政大学）

サモア諸島

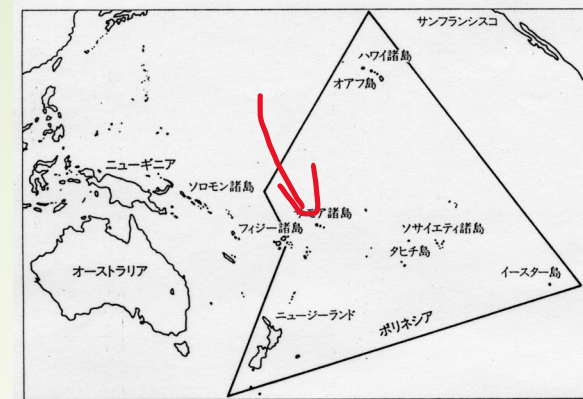
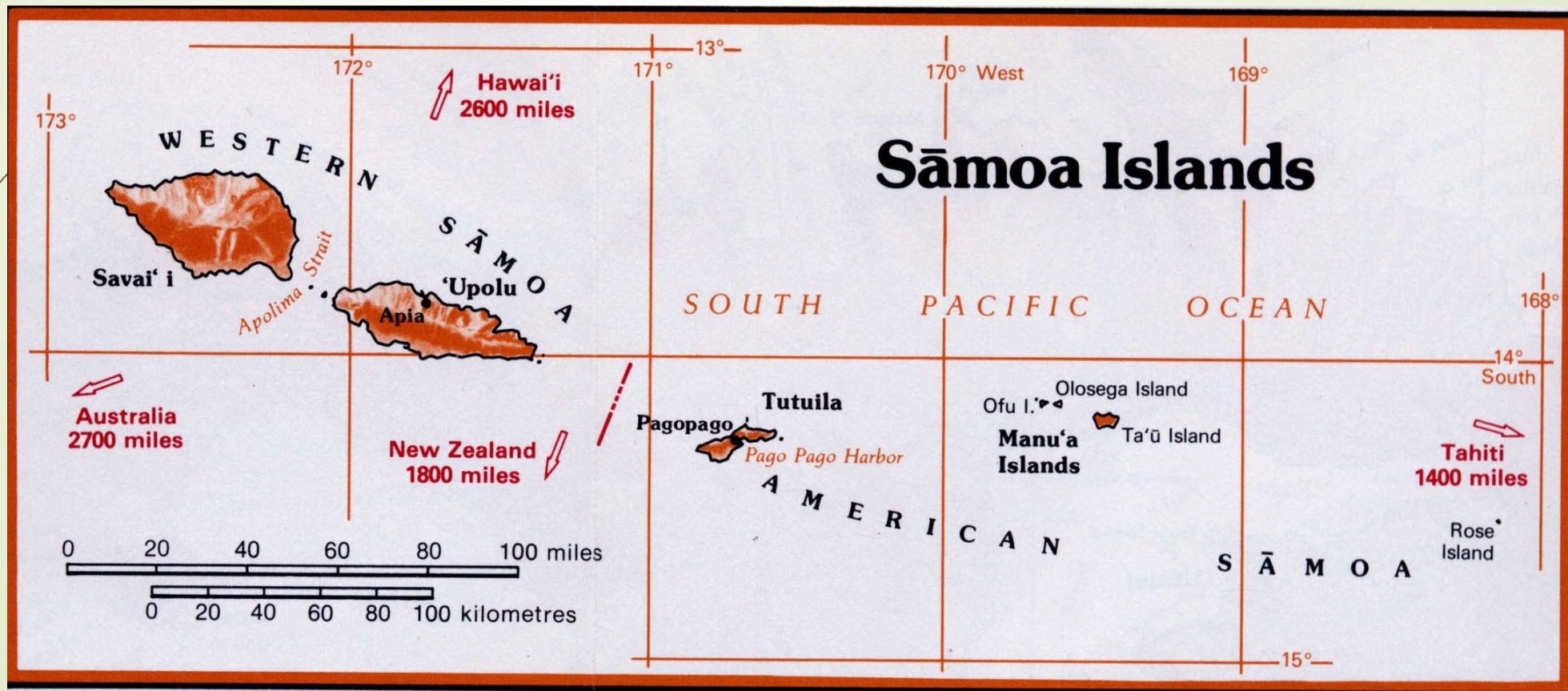


図1 太平洋諸島



サモア諸島年譜

- ▶ 1830年 ロンドン伝道協会 J. Williams来島（教師、宣教師、聖書、神学校、学校）
- ▶ 1850年前後 アピア多国籍社会の成立
- ▶ **1857年 Godeffroy社支社設立（コブラ、ココナツオイル、真珠etc. +blackbirding）**
- ▶ 1861年 Godeffroy支社支配人Theodore Weber、アピア駐在ドイツ領事、プランテーション開発を目指して30000haの土地入手。この頃、首長間の紛争激化。
- ▶ 1870年代 国家間つば競り合い、独・英・米が残る
- ▶ 1889年 ベルリンにて、独・英・米、サモア問題を終結させる最終決議
- ▶ 1899年 西サモア→独、東サモア→米に分割合意
- ▶ **1900-1914年ドイツ統治** 1908年 第一次マウ運動
- ▶ **1914-1962年 ニュージーランド統治** 1926-1936年 第二次マウ運動

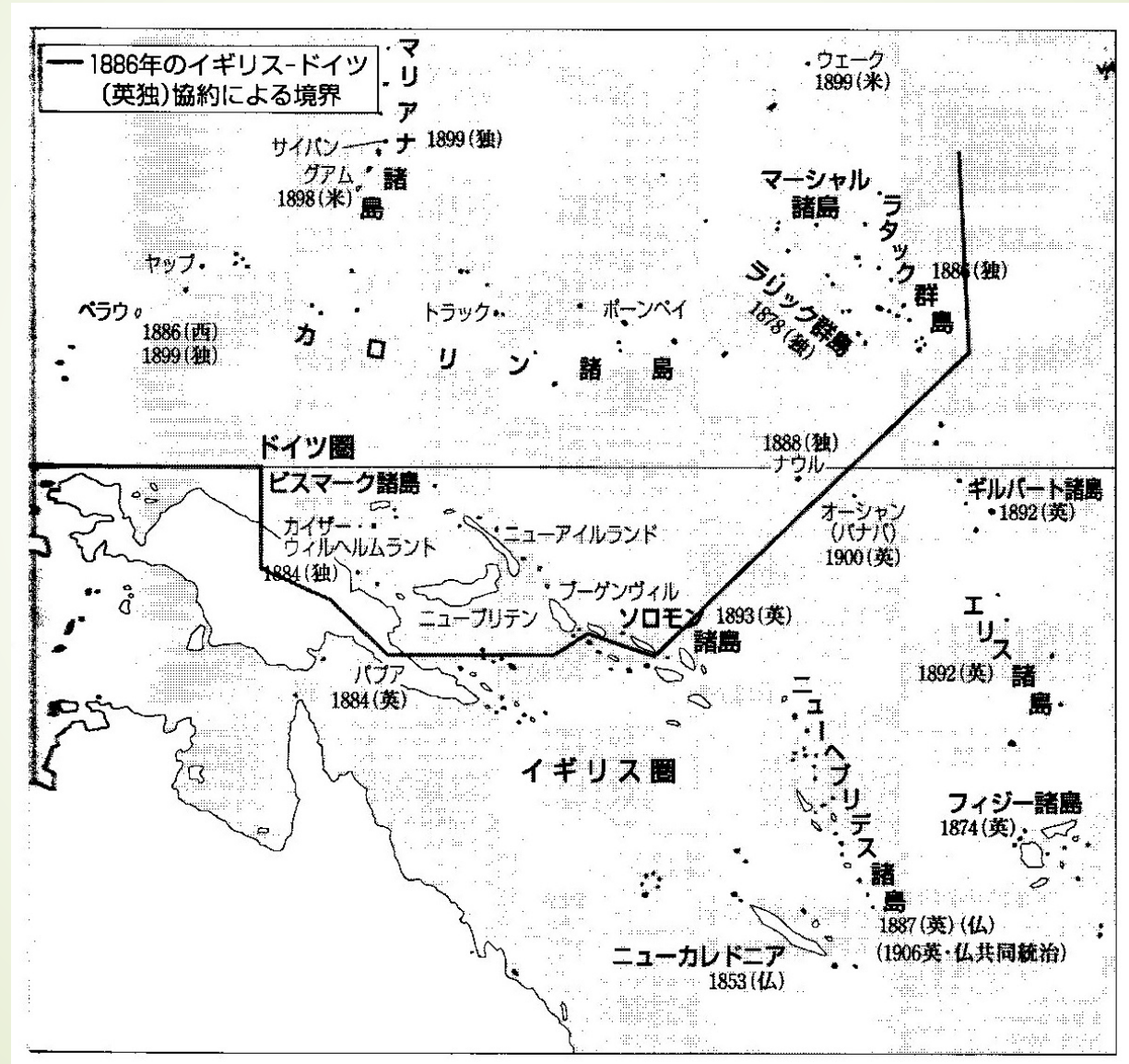
プランテーションと労働力

- ▶ プランテーションは農業の資本主義的開発：植民地主義と共に。大土地所有、しばしば所有と経営の分離、単一作物（タバコ、綿花、サトウキビ、ココヤシ、カカオ等々）
- ▶ 農民ではなく労働者を使う。最初は**原住民**、その後**奴隷制**。奴隷制廃止（18世紀終わりより）や禁止の流れで**年季契約労働者**が使われるようになる。移民、移住。
- ▶ サブシステンスはなく、食糧購入が普通。
- ▶ 奴隷ではないが、初期の頃は明確な線引きは難しい。
- ▶ 契約期間中は雇用主を変更できないことが多い。自前で渡航できないので、そこで借金を負う。
- ▶ 契約終了後どうなるかは、受け入れ先の事情で異なる。残留、帰還、自由、再契約等々。
- ▶ 身分がどうなるかは、受け入れ先の法制度で異なる。

サモアのプランテーション開発

- ▶ Godeffroy社アピア支社設立 1857年 (August Unshelm)
- ▶ **プランテーション開発 1861年に土地取得始まる。**
- ▶ **常に労働者不足**
- ▶ 1860年代、サモア内戦で多くの土地が売られる。しかし政情不安により開発は進まない。転売目的の土地売買も。Godeffroy社、プランテーション開発
- ▶ 1889年ベルリンで三国会議 (英・米・独) —土地問題、アピア自治区、主権者
- ▶ 1891年 Land Commissionで所有権確定。実際にみとめられたのは全土の8%。現在でも8割が伝統的所有地 (親族集団、村落の所有)、**政府有地10%、5%が私有地**でそのうち半分は、農業公社 (Godeffroy→DHPG→NZRE→WSTEC) の土地。
- ▶ 個人プランター (多国籍) もいた。マイナーな産業。
- ▶ **土地が限られている。一方、常に労働者不足に悩まされる。**

ドイツの太平洋進出地図



ドイツのメラネシア系労働者徴集

- ▶ 1870年代 Gilberteseを入れていたこともあるが、記録が少ない。
- ▶ 1882年～1884年、4,440名がフィジーとクイーンズランドへ、**サモアには606名**。1863年から1914年の間に10万人のメラネシア人がクイーンズランド、フィジー、サモア、ニューカレドニアへ（ニューヘブリデス、ソロモン、バンクス、トーレス、ロイヤルティ諸島）
- ▶ これと別にドイツ領ニューギニア内で85,000名が労働者に 1884-1914の間
- ▶ **サモアは規模としては小さい。**
- ▶ 最初はメラネシア系労働者の徴集について、うるさかったイギリスが、メラネシア系労働者に興味なくなる。（フィジーはインド系を1885年から導入、クイーンズランドは、白人労働者増、合理化で、メラネシア系不要、白豪主義も）
- ▶ サモアのプランテーションの生活、実態はよくわからないが、プランテーションの隔絶された生活、病院に行けない、労働は過酷、体罰、減給あり。ただし**ブラックバーディングではなかった**。帰国組が多いが、サモア女性と結婚・残留も

ドイツ領サモア・人種区分による人口 (Wareham 2002: 177に基づく)

	サモア人	太平洋諸島人	中国人	アピア在住中国人	白人	ハーフ	外国人計	総計
1901	32,815	811	13	-	347	536	883	34,522
1903	32,612	978	12	-	381	599	980	34,582
1906	33,478	1,182	770	-	454	815	1,269	36,699
1908	33,478	1,347	1,050	-	436	938	1,374	37,249
1910	33,478	1,347	1,353	-	473	1,003	1,476	37,654
1912	33,554	1,349	1,613	12	504	996	3,125	38,028
1914	33,554	1,422	2,083	17	603	1,019	3,722	38,698

ウェアハムの注：サモア人人口は1901, 1903, 1906, 及び1911にしか調査が行われていない。1911年までは、アピア在住中国人は「白人」に分類されていた。ハーフの数は嫡出子も非嫡出子も含んでいる。太平洋諸島民はおよそ800人ほどいたメラネシア人年季契約労働者（DHPGプランテーション）と在住非サモア人を含んでいる。1908年と1910年の間はとられていない。著者による注：総計は著者の計算。ネイティヴ身分のものについては薄墨色をかけた。

西サモアの中国系年季契約労働者（1）

- ▶ メラネシア系労働者が導入できたのは、DHPGのみ。
- ▶ 他のプランテーション経営者も労働力を必要とする。
- ▶ サモア人は労働者として使えない。守るべき対象。といった議論あり。
- ▶ 1903年に、サモア人側も納得してSwatowから289名導入。**1903年から1913年の間、3,868名導入（ドイツ時代）**。1920年から1934年、**3116名導入（ニュージーランド時代）**。
- ▶ **単身の男子のみ**。妻は郷里に置いて、出稼ぎ。
- ▶ 3年契約、衣食住タダ、medical careあり、実態は嘘が多く、奴隷扱いに近かった。体罰あり、死者多い、警察もひどい、ニュージーランド時代にはデモや労働争議も。
- ▶ **1908年から中国領事館できる。労働者保護を行い、多少ましになるが、ニュージーランド政府は目の敵**。
- ▶ 地位の階層化あり、白人入植者、アフアカシ（混血）、サモア人、その下が年季契約労働者（結婚の自由なし）
- ▶ Free-settler身分を望むが、なかなか与えられない。

西サモアにおけるニュージーランド政府の人種政策

欧米人

飲酒可
会社所有
首長称号と伝統的土地にアクセスなし
立法会議に代表権あり

サモア人

飲酒不可
会社所有不可
首長称号と伝統的土地にアクセスをもつ
ファイプレ議会に代表権あり

西サモアの中国系年季契約労働者（2）

- ▶ ニュージーランド政府、年季切れは帰すという方針。**1914-1920年に1200人帰還させる。たちまち労働者不足。**プランテーション産業は植民地経営に必要。
- ▶ 体罰、投獄、欠勤減給などひどい扱い
- ▶ 一方で、opium、賭博、アルコール飲料密造などもあり
- ▶ **1918年以来、サモア女性との間に子どもも生まれるが、非公認。**
- ▶ 夫としてサモア女性には好まれる一方、首長会議ではネガティブな反応。
- ▶ 第二次大戦後に285名の中国人
- ▶ 1948年最後の帰還船、104名乗船。**175名残留。**最後は、private plantationの労働者、白人の召使など、小商いもあったはず（卵、饅頭売り等、職業選択の幅は少ないが、残留者の中からはビジネスに進出も）
- ▶ その直後、結婚は認められた。
- ▶ 1959年の請願に至るまで、投票権も付与されなかったため、neglected。

西サモア人口統計（1921年、1951年）

	1921.04.17	1951.09.25	Inc/dec
サモア人	32,905	77,832	+44,927
欧米人ハーフPart-Europeans	1,231	4,199	+2,968
欧米人	835	393	-442
中国人	1,290	164	-1,126
メラネシア人	465	50	-415
その他	-	458	+458
計	36,726	83,096	+46,370

(New Zealand Government, Department of Island Territories 1952: 46)

西サモア 1951年9月センサス

(New Zealand Government, Department of Island Territories 1954: 169)

サモア人	79,600	サモア人ハーフ	4,142
他のポリネシア人	501	欧米人	450
トケラウ人	194	中国人	164
ニウエ人	137		
ギルバート・エリス諸島人	109		
トンガ人	61	欧米人身分者	4,756
メラネシア人	52		
フィジー人	9		
ソロモン諸島人	43		
サモア人身分者	80,153	総計	84,909

文献 (抄)

- Davidson, J.W. (1967) *Samoa mo Samoa: The Emergence of the Independent State of Western Samoa*. Melbourne: Oxford University Press.
- Droessler, Holger (2022) *Coconut Colonialism: Workers and the Globalization of Samoa*. Cambridge MS: Harvard University Press.
- Firth, Stewart (1977) Governors versus settlers: The dispute over Chinese labour in German Samoa. *New Zealand Journal of History* 11(2): 155-179.
- Liua'ana, Ben Featuana'i (1997) Dragons in little paradise: Chinese (mis-) fortunes in Samoa 1900-1950. *The Journal of Pacific History* 32(1): 29-48.
- Leung Wai, Aumua Ming (2021) Reflections on the experiences of the Chinese Community in Samoa. *The Journal of Samoan Studies* 11(1): 64-74.
- Meleisea, Malama (1976) The last days of the Melanesian labour trade in Western Samoa. *Journal of Pacific History* 11(2): 126-132.
- Munro, Doug and Stewart Firth (1990) German labour policy and the partition of the Western Pacific: The view from Samoa. *The Journal of Pacific History* 25(1): 85-102.
- Tom, Nancy Y.W. (1986) *The Chinese in Western Samoa 1875-1985: The Dragon Came from Afar*. Apia: Western Samoa Historical and Cultural Trust.
- Wareham, Evelyn (2002) *Race and Realpolitik: The Politics of Colonisation in German Samoa*. Frankfurt: Peter Lang.
- 山本真鳥 (2023) 「オセアニア植民地時代における非白人移住者 (2) ——サモアのプランテーション開発と年季契約労働・序説——」 『経済志林』 90(3/4): 95-122.

※この研究は、科研費研究「オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究」(課題番号19K01208)の一部をなすものである。

※※プログラム掲載の抄録に訂正があります。右列の下から12行目「辛亥革命後の1911年」→「1909年」と訂正をお願いします。